

フリークライミングによるコミュニティーづくりの事例的研究 「ららぽーと柏の葉」における経緯

徳山郁夫¹⁾ 武田美奈²⁾ 鈴木進吾³⁾

¹⁾千葉大学環境健康フィールド科学センター (教育学部兼任)
²⁾東京都北区健康増進センター・運動指導員 ³⁾千葉大学教育学部・学生

A Case Study of The Particulars of Lalaport KASHIWANOHA Free-climbing Community

TOKUYAMA Ikuo¹⁾ TAKEDA Mina²⁾ SUZUKI Shingo³⁾
¹⁾Center for Environment, Health and Field Sciences, Chiba University, Japan
²⁾Kita-ku Health Up Center, Tokyo, Japan; Exercise Instructor
³⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan; Undergraduate Student

2006年11月オープンした商業施設「ららぽーと柏の葉」には、商業施設をコミュニティーの場にする試みとしてフリークライミング・ウォールが設立された。その設立および運営までの経緯を記録し、街づくりにおけるスポーツが果たす役割について新たな一面を記述したものである。

キーワード：コミュニティー (Community) 街づくり (Town management) 商業施設 (Shopping center)

はじめに

2006年11月21日グランドオープンした「ららぽーと柏の葉」には、高さ12mのフリークライミング・ウォールが設置された。このフリークライミング・ウォールは、「ららぽーと柏の葉」の営利事業を目的とするものではない。2005年8月に開業したつくばエクスプレスの柏の葉キャンパス駅周辺街づくりの象徴的存在として、さらに市民のコミュニケーションの場という位置づけとして、三井不動産株式会社 (以下、三井不動産株)、および株式会社ららぽーと柏の葉 (以下、「ららぽーと柏の葉」) によって作られ、市民の手に委ねられたものであり、極めて特異な例である。本研究は、このフリークライミング・ウォールの企画が具体的な形になり、運営が始まるまでの経緯を一事例として記録するとともに、本事例から街づくりとスポーツのかかわりを論じるものである。

I. 第一ステップ：～発端～

2005年12月15日 (金)、本学環境健康フィールド科学センターに三井不動産株、椎名一博・柴田志通両氏の訪問を受けた。訪問の主旨は、「ららぽーと柏の葉」の開業、あるいはそれに続く街づくりに向けて、スポーツを核とした健康づくり推進事業の展開についての意見を聞きたいということであった。両氏が著者を訪れた経緯は、椎名氏が2004年3月に本学とジェフユナイテッド市原の共催によって開催されたスポーツ指導者セミナーのシン

ポジウム「いのち輝く街づくりをめざして はじめの一步 スポーツからのメッセージ」¹⁾に出席され、“人と人の交流をデザインする”という主張に強い関心を持ったことに端を発する。このシンポジウムでは、コミュニケーションがうまく行われていない日常的な具体例が紹介された。また、コミュニケーションについては、強いリーダーに従うというような上意下達の域を超えた理解がなされていないことが指摘された。さらに、労働を過大に評価した価値観のもとで都市開発がおこなわれており、労働を離れた時空間が蔑にされ、個人主義化した市民は自分の家の中のイメージしか描けなくなっており、共有する「街」についてコミュニケーションを図ることができなくなっていると指摘された。そして、大人が年齢、性別、職業等を超えたコミュニケーションをデザインし、街の人間関係の活性化を実践することにチャレンジしなくてはならないということ、スポーツに関わってきた人たちがスポーツを偏狭な固定観念に閉じ込めることなく、スポーツを基軸に人と人の交流、創造的課題解決、そしてコミュニケーションなどの重要性を伝えることを企画していかなければならないという提言がなされた。

【最初の面談における著者の意見】

1) 健康観

著者は、この相談の冒頭に自身の健康観を説明し、お二人に了解を求めた。

現在わが国ではさまざまな角度から疾病の予防対策が講じられ、世界的にもトップの長寿を達成するほどその成果を上げてきた。ここまでの成果は、個体を対象化し、個体の機能低下を招く要因を分析することにより達成さ

著者連絡先：

れたものとする。しかし、これからの生活の質の向上(QOL)を本質的に考えると、一人一人の生命の実存的価値を如何に発揮するからということになると考える。つまり、他者との関わりから自己の意味を確認し、その「生きがい」によって身体を活性化することである。

機械化が進行し便利になり経済的に豊かになった観がある20世紀は、同時に著しい環境破壊が進行した。現代人は、機械やモノに依存し、その結果、家族を崩壊し、コミュニティを崩し、過度な個人主義的な生活に陥った。このような状況下では、核家族化、少子化、超高齢化、そして経済格差は、なお新たな社会問題を生む可能性をはらんでいる。快適な空間に居住し、便利な機器に囲まれて暮らす働き盛りの若年層も鬱病を病み、学校でのいじめは横行している。もはや健康は、身体という個体に閉鎖された問題ではなく、他者との間に開放された社会の問題として検討されるべきである^{2,3,4,5,6)}。

人間の身体的機能がある時期から加齢とともに低下することは否めない。しかし、たとえ身体機能が低下しようと、疾病状態にあらうと、その人は元気に生きたいのである。弱気になり萎えそうになるその気持ちを鼓舞するものを個体のなかだけにもとめることはできない。他者との相互関係に“よりよく生きる意味”を見出すことによる生活の質の向上が求められる。それはより深いコミュニケーションによって達成できるものである。

2) 街づくりについて

近年、都会の街は、他人ばかりになっていく。現代社会の都会で行き交う人は、自分には関わりのない人であり、関わって欲しくない人であると思っていることが多い。困っている人や痛んでいる人がいても声をかけることは僅かで、無視し、無視されることが多い。不用意な他人との関りが傷害事件などの不幸につながりかねない。他者と時空間を共有しているという感覚は希薄になり、マナーはおろかルールさえその存在が危機的状況にある。弱者や障害者には一層住みにくい時空間になりつつある。お互いの顔を認知することで街の犯罪率を減少させているというシンポジウムで話された例を紹介した。人間が共同して生きるマナーとルールが学べる街、温かいコミュニティが育つ街にしたいという希望を述べた。

3) フリークライミングについて

話し合いの当初は、フリークライミングというアイデアは全くなかった。しかし、話し合いを進め、コンセプトを確認し、具体的な活動を検討する段階に至り、フリークライミングが浮上した。

商業施設の建設は既に始まっている。このために新たなスペースを設けずに実施できる活動、街づくりに象徴的な活動ということでフリークライミングを提案することに至った。

千葉大学では、2000年度(後期)から普遍教育、スポーツ・健康科学として「フリークライミング」を開設している。フリークライミングの特徴は、性別、年齢、体力、経験などの個体差を問わず誰にでも楽しく参加できることであり、その楽しさは、「できないこと」に向き合い「できること」に変えていくチャレンジ精神、その過程を自分で創造すること、その達成感、そしてお互いの支援を実感できることである⁷⁾。この構図こそは、街づく

りの象徴になるものであると考えた。

著者が関わってきたアドベンチャー教育では、“コンフォート・ゾーン”(Comfort zone; 慣れ親しんでいて安心が得られる領域)から“ニュー・テリトリー”(New territory; 未体験の新しい領域)へ自らの意思決定に基づいて一步を踏み出すことが、自己の成長を誘発するとされている⁸⁾。フリークライミングでは、一度制覇したルートを繰り返し登っても大きな達成感を得られない。したがって、踏破できない難しいルートを探してチャレンジするようになる傾向が強い。フリークライミングでは、“失敗”を恐れ安易な目標に取り組んでいてもコンフォート・ゾーンを押し広げることができない。難しいルートへのチャレンジでは、“失敗”(目標を達成できないこと)も体験せざるを得ない。“失敗”からは大いに学ぶところが大きいことを知る好機でもある。周囲の人が“失敗”を非難するようになると、“失敗”を恐れるようになりお互いが牽制し、冷たい雰囲気を作られる。お互いのチャレンジを見守り支援することを体験できる街をつくりたいと考えた。

高くそびえるフリークライミングの壁は、説明するまでもなくチャレンジを想起させる。同時に、危険性も感じ取られ緊張感を生み出す。この危険性を回避し、安全にチャレンジを遂行するためにはルールやマナーが必要であり、他者の支援が必要となる。性別、職業はもちろん世代を越えてルールとマナーを共有し、他者のチャレンジを支援するコミュニティは、新しい街づくりの象徴的存在になり得るものである。

昨今、子どもの体力低下が指摘されている。「安全・安心⁹⁾」という標語が氾濫するなかで、管理責任が問われることへの強迫観念が独り歩きし、安全対策に莫大な経費がかかるようになっていく。「安全・安心」は、国や企業などが与えるものだと考えがちになっているが、当事者同士のお互いの配慮、回避能力を養う自己責任の問題でもある。子どもの体力低下は、遊び場からあらゆるリスクを撤去し、進学準備に時間を費やすようになった結果でもあり、子どもたちの“野蛮な時期¹⁰⁾”を奪い取ったところ由来のものでもある。子どもたちの体力低下よりも、その精神のひ弱さこそが懸念されるところである。街づくりに社会の根本的な問題への取り組み姿勢を反映させ、コミュニティを形成すべきであると考えた。フリークライミングは、決して若者だけのスポーツではなく、息の長いスポーツである。

著者は、フリークライミングを具体的に見たことがない柴田氏が具体的なイメージを描けるように、JR津田沼駅「ヨシキ&P2」代表取締役、吉野清氏を紹介するとともに、吉野氏にフリークライミング・ウォールの写真を提示できる準備を依頼した。吉野氏は、(有)ホッチホールドアンドボード社の堀地清次氏に相談した。

II. 第二ステップ：～胎動～

2006年

1月6日(金) 柴田氏、吉野氏、堀地氏打ち合わせ

柴田氏は「ヨシキ&P2」の吉野氏を訪れクライミングウォールを見るとともに、堀地氏を交え具体的な



写真1 「ららぽーと柏の葉」建設工事（2005.10.7）

ウォールの用途を話し合い、この話し合いを基にした具体的なデザインの提示を求めた。

柴田氏は既に商業施設をコミュニティの場にするという発想に強い関心を持ち、社内で説得にあたった。この説得を受け「ららぽーと柏の葉」準備室の松崎毅氏、三宅法子氏、百瀬百梨氏は、JR津田沼駅「ヨシキ&P2」スポーツ店を訪れ店外で開放しているフリークライミング（高さ9m）に実際に触れて興味を持った。

1月14日（土）デザイン案（第一案）の提示

堀地氏より設計図（第一案）が提示されたが、柴田氏より予算面での修正が求められた。同日、柴田氏からウォール設置場所の案（センタープラザ正面：現在の設置位置）が伝えられた。設置場所は、夜間の管理上から外部から人が入れないところに設置することになった。同時に、建物のデザイナーにより色について、建物の壁と一体にする規制がかけられていること、FRP素材を望んでいることが伝えられた。

2月1日（水）柴田氏千葉大学授業参観

著者が担当する普遍教育のフリークライミングの授業を参観され、自発的に難しいルートに挑む学生の態度、思い切りよく挑んでみごとに落下する女子学生の態度に関心を示した。

2月10日（金）デザイン案提示（第二案）

社内の承認が得られたことを受けて、現行設計図が提示され検討された。

柴田氏と面談してから約2カ月で、三井不動産株は一つのアイデアを実現する方向に意思決定を行った。フリークライミングについて全く情報を持っていなかった柴田氏が社内を説得し、合意を得ることは容易ではなはずである。たとえコミュニティづくりをメインに説得したとしても、それとフリークライミングとの結び付きを説明することも容易でないことは想像に難くない。その一方でこの意思決定から柏の葉キャンパス駅周辺の街づくりを新しいコンセプトで臨もうとする三井不動産株の意気込みも推察できる。新しい取り組みは、失敗を恐れ、容易に始まらないことが多いものである。しかし、柴田氏の情熱と三井不動産株の生きた街づくりへ懸ける姿勢が新しいことを動かしたものといえる。

Ⅲ. 第三ステップ：～始動～

「ららぽーと柏の葉」フリークライミング・ウォールは建設される方向で動き出した。そこで、「ららぽーと柏の葉」の建設を請け負う三井住友建設関係者、「ららぽーと柏の葉」開業準備室関係者が会し、建設に関する打ち合わせと運営にかかわる打ち合わせを行うクライミングウォール運営会議を発足させた。

2月23日（木）第1回クライミングウォール運営会議

関係者による初会合がもたれ、設計面の打ち合わせが行われた。

柴田氏、松崎毅氏（ららぽーと柏の葉開業準備室室長）、村瀬竜一氏（三井住友建設株）、中島秀樹氏（三井住友建設株）、富田衛氏（三井住友建設株）、板橋弘和氏（三井住友建設株）、齋藤直樹氏（三井不動産株商業施設本部）、百瀬由梨（「ららぽーと柏の葉」開業準備室）、吉野氏、堀地氏、著者。

同日、千葉大学環境健康フィールド科学センターで行われた環境健康講演会にゲスト講師としてプロジェクトアドベンチャー・ジャパン代表取締役、林寿夫氏をお招きした。柴田氏は、この講演会にも出席し、アドベンチャー教育の理解のために情報を収集していた。

4月7日（金）第2回クライミングウォール運営会議

設計面（周囲のスペースとの関係など）での確認作業が進められた。

4月20日（木）第3回クライミングウォール運営会議

「ららぽーと柏の葉」開業準備室からウォール担当者として、伊藤博史氏、三宅法子氏が会議に加わった。

施工上の打ち合わせに加えて、運営上の打ち合わせが本格的に始まった。ここからの運営会議では、繰り返しフリークライミングを商業施設内で実施するコンセプトの確認、安全管理上の問題、運営組織の問題が検討された。

5月18日（木）第4回クライミングウォール運営会議

施工上の問題としては、建物本体の鉄骨構造、建物とウォールの接合などについて確認。安全性の問題を中心について検討された。高さ2mまでの“ボルダリング・エリア”（ロープを使わずに登るクライミング）を設けるか否かについて検討。クライミングをしている人の事故、通行人との接触事故、事故の管理責任についての検討。

6月13日（火）第5回クライミングウォール運営会議

ハード面では、工期の確認（他の部分の工事工程との詰め）を確認。

ウォール稼働時の管理法、非稼働時の管理法、利用受付窓口について検討。教育関係、クライミング関係の賛同者を集め、組織固めを進めることを確認。

6月15日（木）ウォール建設契約に関する打ち合わせ

7月18日（火）第6回クライミングウォール運営会議

梶谷昌生氏（野田市山岳協会クライミングクラブ）が運営会議に参画。

ウォール建設の契約を締結し、工事を進める段階に入った。そこでいよいよ運営面の問題を詰めることが急がれた。運営会議メンバーがそれぞれの立場から趣旨説明文を持ち寄る。「ららぽーと柏の葉」とは別にクラブ

組織をつくり、この組織が企画・運営を行うという方向が決まった。

8月1日(火) 第7回クライミングウォール運営会議

初回イベントの計画。「ららぽーと柏の葉」の非常勤スタッフにクライミング窓口担当者を雇用することを検討。安全上の問題として、管理者がいない平常時は、登れないようにカバーをかけることにする。

クラブ組織が主催する。「ららぽーと柏の葉」、三井不動産株は協力という立場をとる。ただし、クラブのウォール使用料は無料とする。参加者からの参加費の徴収は(すべき)クラブ組織は千葉大学内に立ち上げるNPO法人「健康まちづくりネットワーク」に位置づける。ホームページを立ち上げる。

8月25日(金) 第8回クライミングウォール運営会議

さわやかちば県民プラザ普及課増子主査、土屋主査がミーティングに加わる。

9月29日(金) 第9回クライミングウォール運営会議

保険についての検討。備品の収納に「ららぽーと柏の葉」から倉庫が提供される。ミーティングの後「ららぽーと柏の葉」工事現場にてウォール見学。野田市、習志野市、千葉市、つくば市のクライミング経験を持つ方々に声をかけ、安全技術の指導員候補を育成する。

10月18日(水) 第10回クライミングウォール運営会議

10月21日(土) 研修会1

9月29日運営会議に基づき、野田市、習志野市、千葉市、つくば市のクライミング経験を持つ方々に声をかけ、安全技術の指導員候補を対象に研修会を行った。技術指導顧問を梶谷氏とし①入館手続き、②装備の運搬、③セッティング(ホールド、ハンガーの緩みの点検、ウォール本体および周辺的安全確認、トップロープのセッティング、ソフトマットのセッティング、各用具の使用法、指導についての注意など)、④撤収方法、⑤商業施設内という特殊性への注意(他の買い物客への配慮)を研修内容とした。社会人ボランティアの勤務を配慮し、研修会は土・日・平日夜間に開催した。

10月24日(火) 研修会2

10月27日(金) 装備・備品搬入

ソフトマット、ハーネス、シューズ、クライミング用装備、搬送用台車などの搬入。

10月28日(土) 研修会3

10月31日(火) 研修会4

11月3日(金) 祭日 センター祭(千葉大学環境健康フィールド科学センター)

センター祭講演会にて、「ららぽーと柏の葉」のフリークライミングによるコミュニティーづくりを紹介。

11月4日(土) 研修会5

11月5日(日) 研修会6

11月7日(火) 研修会7

11月9日(木) 研修会8

11月12日(日) 関係者へのお披露目

「ららぽーと柏の葉」関係者、および研修会に参加した方々の顔合わせをかねたお披露目が行われ20名のクライマーが集まった。

11月18日(土) イベント準備試行



写真2 完成時のウォール

11月19日(日) さわやかちば県民プラザ、ボランティアフェスティバルに出展

移動式仮設ウォールによるフリークライミングに触れる体験、写真展示および「ららぽーと柏の葉」におけるフリークライミングの趣旨説明。

建設の意思決定がなされて以降、ハード面は建築関係者に委ねられた形になった。そこでクライミングウォール運営会議の課題は、このウォールの管理運営組織に絞られた。しかし、商業施設をコミュニティーの場にするという発想を具体化することは容易なことではなかった。

クライミングウォール運営会議は、事故およびこれに基づく訴訟に対する責任の問題から話し合われたが、なかなか落ち着く案がないまま会議を重ねた。コミュニティーの場として機能させる理想を追求する意見としては、使用できる高さを制限して、常時開放するという主張であった。公園の遊具(海外では小さなクライミングウォールが公園に設置されている例は珍しくない)のように設置し、子どもも大人も自由に使用し、体験を共有しながらそこで出会う人たちのコミュニケーションを図るツールとして機能させることである。しかし、フリークライミングに対する認知度が低いわが国の現状では、リスクを予知できず思わぬ怪我(クライマーだけでなく買い物客がおり、買い物客はクライミングによるリスクに関心を払わないのは当然のことである)をすることも危惧された。近い将来としては、地域のボランティアスタッフにより、安全な遊び方の指導と買い物客への注意の喚起が行われたなら、開放する時間を少しずつ拡張できる。しかし、常時開放は将来的な目標とすることになり、通常はシートカバーをかけて使用時のみにこれを外すことになった。

「ららぽーと柏の葉」にはクライミングウォールを運営するだけの人的余裕がないのが事実だった。この計画

は、建設が始まり、「ららぽーと柏の葉」開業準備室が既に動き出してから出た事案であり、人事に関する変更が困難であることは理解できた。また、些細なことでも訴訟に発展しかねない現在、世間の目からも危険に見えそうなフリークライミングを営業活動として請け負うことは困難であると考えられた。一方で、商業施設をコミュニティの場にするというコンセプトを具現化するのがクライミングウォール導入の主旨であるならば、商業施設内に市民が運営する組織があることに意義があると考えた。そこで、新たに運営組織（“LKCC”）を作り、千葉大学環境健康フィールド科学センター内に所在地を置くNPO法人「健康街づくりネットワーク」（2006年11月承認）の傘下に位置づけ、コミュニティづくりを推進することになった。“LKCC”は、フリークライミング実施、イベント企画、利用受付・問合せ窓口など行う運営組織である。この運営組織は近隣地域住民が参画できるように開かれていることが、このプロジェクトの大きな特徴でもある。

（HPアドレス；<http://www.lala-climbingclub.com>）

Ⅳ. 第四ステップ：～躍動～

2006年

11月20日（月）ららぽーと柏の葉竣工式

11月21日（火）ららぽーと柏の葉グランドオープン

12月3日（日）体験会リハーサル

12月9日（土）体験会（雨天中止）

Faxとメールによる予約制により申し込みを受け付けた。雨天のためボランティアメンバーにより早朝から参加申込者への中止連絡を行った。

12月10日（日）体験会10：00～12：00，13：00～15：00
9日分の申込者も10日に繰越して参加していただいた。
（115名参加）

体験会実施後、ボランティアメンバーにより反省会が実施された。参加者が複数回チャレンジできる機会を作りたいこと、参加者とボランティアとの交流の時間を持つことなどを反映するために、50分毎に10名の参加者を入れ替える方式に変更が提案された。

2007年

1月14日（日）1月体験会（40名参加）



写真3 体験会の様子(1)

クライミングの様子を見て当日参加を希望する人たちにも道を開きたいという提案があり、2月からは15名/50分（60名/1日）を受け付けるように変更が提案された。

2月25日（日）2月体験会（54名参加）

3月18日（日）3月体験会（60名参加）

4月15日（日）4月体験会（63名参加）（スパイダーマンのプロモーションイベント）

5月13日（日）視覚障害者のフリークライミング実践指導

同時開催シンポジウム「いのち輝くまちづくりをめざしてメンタルバリアフリーに向けて」（環境健康フィールド科学センター）視覚障害者フリークライミング世界大会優勝者小林幸一郎氏（NPOモンキーマジック）。

この席上で、自らも視覚障害者であり、視覚障害者にフリークライミング体験を支援するNPOモンキーマジックを主宰する小林幸一郎氏は、フリークライミングが視覚障害者に適している理由を1)対戦相手が動いたりボールを使ったりするスポーツと違い、岩や人工の壁と向き合うので、自分の速さで楽しむことができる、2)ロープで安全が確保されているので思い切り身体を活動させられる、3)健常者（晴眼者）と同じ課題を楽しめるので相互理解が促進できる、4)自らの力で課題解決するその過程は、日常の生活力向上に期待できる、5)外出やスポーツから離れがちな視覚障害者にとって余暇の選択肢が広がると説明した。しかし、この説明は視覚障害者だけに該当するものではない。子どもから高齢者まで幅広く街の方々を楽しみながら交流を広げる可能性を示唆するものである。このシンポジウムに先立って行われた「ららぽーと柏の葉」における視覚障害者による実演では、その光景に多くの観客が自分も挑戦したいという勇気もらい、次の体験会の予約が殺到した。

5月20日（日）5月体験会（65名参加）

6月からレディース&シニア教室、親子教室を開催。

6月17日（日）6月体験会（66名参加）

（7月体験会は雨天中止）

8月19日（日）8月体験会（59名参加）

9月16日（日）9月体験会（63名参加）

〈2007年9月までの体験会参加者延べ585名〉

「株式会社ららぽーと柏の葉」オープン時から、NPO法人「健康まちづくりネットワーク」が掲げるスポーツによるコミュニティづくりという事業の一環として、クライミングクラブ“LKCC”がクライミングウォールの運営（ウォールの点検調整、イベント企画運営、広報）を担当している。現在、技術研修を受けた“LKCC”ボランティアメンバーは、21名である。体験会には常時、10名以上が参加し、一般参加者のチャレンジを支え安全確保をおこなっている。

毎月第三日曜日（雨天の場合、次週に順延）に行われる体験会には繰り返し参加する方々もいる。参加者には、親子、夫婦、祖父と孫など、さまざまな組み合わせの方々もいる。これまでの完登者最高齢は73歳、最年少は5歳と参加者の年齢幅は広い。繰り返し参加される方々には、さらに幅広いフリークライミングの楽しみ方をお伝えしたいという趣旨で6月からレディース&シニアク



写真4 体験会の様子(2)

ライミング教室と親子クライミング教室を開催している。

クライミングを行っているというお客が「へーエ！」という顔で足を止め、関心を示す。「どうですか？」と感想を求めると「落ちたらどうするんだろう?」「降りる時はどうやって降りるんですか?」「誰でもできますか?」「触ってみませんか?」とそれまでは見ず知らずだった人の間に会話が始まる。4月と5月の体験会では、映画「スパイダーマン3」のプロモーション活動の一環として、クライミングウォールを使ってLKCCメンバーによるショーが演じられた。以来、フリークライミング・ウォールの認知度は上がっている。

現在までに「ららぽーと柏の葉」オペレーションセンターの職員もテナントの店員も少しずつクライミングに関心をもち活動に参加している。お店とは異なる和やかな会話がお客様と店員の間に弾んでいる。テナント店、体験会参加者、隣接する市の山岳会からボランティア参加が始まっている。また、このボランティア活動の主旨に賛同し企業の協賛が始まろうとしている。

V. 考 察

近年、デベロッパーによる大規模な住宅開発、都市再開発、リゾート開発が進められてきた。デベロッパーは、生活基盤を整備し、便利で景観の美しい街づくりに力を注ぎ企業や住民を誘致してきた。こうして造られた街は、暮らす人々の身の丈に合ったものなのだろうか。街や家の構造は、堅固になり豪華になるが、その一方で街の人間関係、親子や夫婦など家族関係は、希薄で危ういものになっているのではないだろうか。もっと温かな人間関係が培われるべき器として街や家が再考されなければならない。街を客観的・俯瞰的に見る立場から構成するだけでなく、その街に暮らす人と人が触れ合うことをデザイン化し、多様で豊かな人間関係が培われるデザインを

反映させるべきである。

企業が芸術文化支援を通じて社会貢献を行う活動をメセナ(mecenat)という。芸術文化支援に限らず、学術研究、教育、福祉、環境問題、そしてスポーツなどさまざまな分野の単独の支援は数多く見られる。スポーツ分野では、大会、教室、チャリティーイベントの開催、協力、企業施設の地域への開放、クラブチームの育成などが見られる。しかし、今回の企業の関わり方は、従来のものと異なるものであると考える。三井不動産㈱は、商業施設を地域のコミュニティの場にするという考え方を基盤に数千万円を投資し、「ららぽーと柏の葉」は“場”を提供した。フリークライミングは、これらのコンセプトを実施する試験的なツールの一つであった。

イリイチ¹¹⁾は、“生活に根差した価値”と“経済的な価値”との衝突を指摘している。二つの価値から「コモンズ〔みんなが共有するもの〕commonsとしての環境」と「資源resourcesとしての環境」という対立概念を導き、“生活に根差した価値”のもとで暮らすということは、いくつもの世帯が一緒に住んでいる環境そのものが「コモンズ〔みんなが共有するもの〕commonsとしての環境」として機能してきたものであるとしている。しかし、あらゆる環境の所有が資本によって分割され、環境はみんなと一緒に暮らすコモンズ〔共有空間〕から、生産のための「資源としての環境」として見なされるようになった。同様に、人々は産業のための「労働力」となり、一方で生産された商品に頼らなければならなくなり「消費者」という経済的資源とみなされるようになった。さらに、イリイチは「居住空間residence spaceを消費している現代人は、〔こうした土地の住人たちは〕位相的にまったく違う世界に生きているとしている。すなわち、「(土地の住人たちの)習慣habitと住環境habitatとは、ほとんど同じことを意味しています。(人類学者の用語を使うと)その土地に根差した建築〔土着建築〕は、その土地のことと同じくらいユニークです。生活する技術の全体、すなわち愛する技術、夢みる技術、苦しむ技術、そして死にゆく技術といった、生活する技術の全体が、それぞれの生活様式をユニークなものにしているのです。」¹¹⁾と述べている。

ピーパー¹²⁾は、現代社会が労働を経済と結び付け、労働を過大に評価し、人間固有の尊厳にふさわしい生き方を掘り下げるための活動、すなわち「余暇」を放棄している姿を「怠惰」と指摘している。「余暇」とは、労働を休止するという意味ではない。小さな自我をぬげでることで世界をあるがままにながめ、その創り主にふれるというアリストテレスに遡る「自由な学芸」に結びつく活動である。

20世紀には、あらゆるものが経済に結びつく「資源としての環境」とみなされ開発されてきた。また、労働以外の活動も経済的な対象となり、街に暮らす人々が共有する時空間は縮小されていった。21世紀の街づくりの最大の課題は、「コモンズ〔みんなが共有するもの〕としての環境」の再生、生きる技術の再生、そして人間固有の尊厳にふさわしい生き方を掘り下げるための余暇活動において人間関係を再構築し、豊かな人間関係を再生することに他ならない。



写真5 真剣に取り組む子ども

「ららぽーと柏の葉」で実施するフリークライミングは、決して優秀な選手の育成を追及することに終始するものではない。地域社会に「コモンズという〔みんなが共有するもの〕としての環境」という考え方が必要であることを啓発し、その再生に寄与することをめざすものである。

地域の多くの方々の参加を得て運営され、仕事帰りに地元の地域の方々と交流する広場として機能することをめざすものである。世代を超えた交流の広場として機能することをめざすものである。現在、フリークライミング体験会には大勢の子ども達が参加しているが、やがて地元の高中生や大学生がウォールを登る子ども達の安全確保のロープを握り、子ども達の成長を支え、地域に貢献することを身をもって知る場所の一つにして欲しいという願いで運営するものである。次世代を担う若者が、自らの街に愛着を持ち、誇りを抱くようにならなければ、街づくりの成功はない。都市開発によってどこの街も同じ表情になってしまう。しかし、自らが街の共同生活を支え合う体験に参加し「コモンズという〔みんなが共有するもの〕としての環境」を実感することで、街への愛着と誇りは育まれるものであり、街が故郷になり得るといえる。

改めて設立経緯を振り返るとき、商業施設をコミュニティの場にするというコンセプトに情熱を傾けた一人の人間の存在、また先行きの見えない運営について真剣に議論したクライミングウォール運営会議メンバーの根気、そして実際にボランティア活動を支えている“LKCC”メンバーの献身が大きいことが理解できる。街づくりは、決して物理的な構造物だけが必要なものではない。人の熱い想いが出逢うことが形を生むということが考えられる。この先、このフリークライミング・ウォールにさらに新しい出逢いが生まれ、思いもよらないコミュニティが生まれることを期待するものである。

謝 辞

三井不動産(株)、「(株)ららぽーと柏の葉」、三井住友建設(株)の関係者各位の理解と勇気ある決断、および、忙しい中LKCCの活動を支えているボランティアのみなさんに深謝します。特に、野田市山岳協会クライミングクラブ、

千葉大学クライミングサークル“On Sight”の卒業生・学生諸君の存在なしには、運営組織の提案さえできなかったと考えます。ここに感謝の意を表します。吉野清氏(「ヨシキ&P2」代表取締役)、堀地清次氏(南ホッチホールドアンドボード)には、クライミングウォールの案が浮上した時点からご相談いただき、LKCCとしてもボランティア活動に参加いただきました。梶谷昌生氏(野田市山岳協会)は技術顧問としてLKCCの研修マニュアル作成から安全講習の指導をご担当くださいました。中村伸明氏(野田市山岳協会)は、足繁くウォールに通い点検整備を行っていただくとともにボランティアの方々をまとめてくださいました。嶺村恵美子氏(「ららぽーと柏の葉」非常勤職員)は、LKCCと「ららぽーと柏の葉」の連絡調整、問い合わせ窓口として活動してくださいました。渡辺敏規氏(NEC勤務)には、HP管理と予約システムを管理していただきました。特に、ここに名前を挙げて謝意を表します。

[参考文献]

- 1) 徳山郁夫編「いのち輝く街づくりに向けて はじめの一步、スポーツからのメッセージ」千葉大学環境健康フィールド科学センター、2006
- 2) 徳山郁夫、松岡信之「ボディ・センサーによるフィールド・ワークとしての体育」千葉体育学研究、第12号、pp. 51-56、1989
- 3) 松岡信之、徳山郁夫「一般教育としての体育 ～情報処理能力を視点として～」一般教育学会誌、第11巻、第2号、pp. 118-120、1989
- 4) 徳山郁夫、松岡信之「一般教育としての体育の展望～暮らしの中の『からだ学』の提唱～」千葉体育学研究、第14号、pp. 63-75、1991
- 5) 徳山郁夫、松岡信之「一般教育に求められる転換～環境教育とからだの見直しの必要性～」千葉大学教養部研究報告B-26、pp. 279-284、1993
- 6) 徳山郁夫、片山孝重、谷藤千香、滝澤文雄、徳山美知代「体育実技における人間関係の変容について～相互的教材開発という視点から～」大学体育、第70号、pp. 15-23、2000
- 7) 徳山郁夫「フリークライミングの授業成果の事例的研究～一般教育としての体験学習の意義～」千葉大学教育学部研究紀要、第51巻、pp. 137-145、2003
- 8) Luckner, J.L. and Nadler, R.S.: *Processing the Experience; Strategies to Enhance and Generalize Learning* (2nd. ED). pp. 29, Kendall/Hunt Publishing, 1992.
- 9) 徳山郁夫「“ハラハラ”“ドキドキ”“ワクワク”と子どもの躰」子どもと発育発達、Vol. 4, No. 4, pp. 235-240、2007
- 10) 国分一太郎「しなやかさというたからもの」晶文社、1973
- 11) イバン・イリイチ「生きる思想」藤原書店、1991
- 12) ヨゼフ・ピーパー「余暇と祝祭」講談社学術文庫、1988